

二階から

岡本綺堂

青空文庫

二階からといって、眼薬をさす訳わけでもない。私が現在閉籠とじこもっているのは、二階の八畳と四畳の二間で、飯でも食う時のほかは滅多めったに下座敷などへ降りたことはない。わが家ながらあたかも間借りをしているような有様で、私の生活は殆どほとんこの二間に限られている。で、世間を観みるのでも、月を観るのでも、雪を観るのでも、花を観るのでも、すべてこの二階から観る。随って眼界は狭い。その狭い中から見出したことの二つ三つをここに書く。

一 水仙

去年の十一月に支那水仙を一鉢買った。勿論相当に水も遣る、日にも当ててる。一通りの手当は尽していたのであるが、十二月になつても更に蕾つぼみを出さない。無暗むやみに葉が伸びるばかりである。どうも望みがないらしいと思つてるところへ、K君が来た。K君は園芸の心得ある人で、この水仙を見ると首を傾かしげた。

「君、これはどうもむずかしいよ。恐おそく花は持もちつまい。」

こういつて、K君は笑つた。私も頭を搔かいて笑つた。その当時K君の悴せがれは病床よこたに横よこたわつていたが、病院へ入つてから少しは良いといふことであつた。ところが、その月の中旬なつかに寒氣むかが俄つに募つたためか、K君の悴は案外もろに脆たおく仆たおれてしまった。K君の悴は蕾

ながらにして散ってしまったのである。私の家の水仙はその蕾さえも持たずして、空しく枯れてしまうであろうと思われた。

年が明けた。ある暖い朝、私がふとかの水仙の鉢を覗くと、長く伸びた葉の間から、青白い袋のようなものが見えた。私は奇蹟を目撃したように驚いた。これは確に蕾である。それから毎日欠さずに注意していると、葉と葉との間からは総て蕾がめぐんで来た。それが次第に伸びて拡がって来た。もうこうなると、発育の力は実に目ざましいもので、茎はずんずんと伸てゆく。蕾は日ましに膨らんでゆく。今ではもう十数輪の白い花となって、私の書棚を彩っている。

殆ど絶望のように思われた水仙は、案外立派に発育して、花と

しての使命を十分果した。K君の悴は花とならずして終った。春の寒い夕ゆうべ、電灯の燦さんたる光に対して、白く匂いやかなるこの花を見るたびに、K君の悴の魂のゆくえを思わずにはいられない。

二 団五郎

新聞を見ると、市川団五郎が静岡で客死かくししたとある。団五郎という一俳優の死は、劇界に何らの反響もない。少数の親戚や知己は格別、多数の人々は恐らく何の注意も払わずにこの記事を読み過いしたであろう。しかも私はこの記事を読んで、涙をこぼした一ちい人である。

團五郎と私とは知己でも何でもない。今日まで一度も交際したことはなかった。が、私の方ではこの人を記憶している。歌舞伎座の舞台開きの当時、私は父と一いっしょ所に團十郎の部屋へ遊びにゆくと、丁度わたしと同年配ぐらいの美少年が團十郎の傍そばに控えていて、私たちに茶を出したり、團十郎の手廻りの用などを足していた。いうまでもなく團十郎の弟子である。

「綺麗な児こだが、何といひます。」

父が訊きくと、團十郎は笑つて答えた。

「團五郎というのです。いたずら者で——。」

答はこれだけの極めて簡短なものであつたが、その笑みを含んだ口吻くちぶりにも、弟子を見遣みやつた眼の色にも、一種の慈愛が籠つて

いた。この児は師匠に可愛かあいがられているのであろうと、私も子供心に推量した。

「今に好い役者になるでしょう。」

父が重ねていうと、団十郎はまた笑った。

「どうですかねえ。しかしまあ、どうかこうにかものにはなりませんよ。」

若い弟子に就ての問答はこれだけであつた。やがて幕が明くと、団十郎は水戸黄門で舞台に現れた。その太刀持を勤めている小姓は、かの団五郎であつた。彼は楽屋で見たよりも更に美しく見えた。私は団五郎が好きになつた。

けれども、彼はその後いつも眼に付くほどの役を勤めていなか

った。番附をよく調べて見なければ、出勤しているのかいないのか判らない位であつた。その中うちに私もだんだんに年を取つた。團五郎に対する記憶も段々に薄らいで来た。近年の芝居番附には團五郎という名は見えなくなつてしまつた。二十何年ぶりこんにちで今日突然にその訃ふを聞いたのである。何でも旅廻りの新俳優一座に加わつて、各地方を興行していたのだという。それ以上のことは詳しく判らないが、その晩年の有様も大抵は想像が付く。

日本一の名優の予言は外れた。團五郎は遂にもものならずにつた。師匠の眼識めがねちが違いか、弟子の心得違いか。その当時の美しい少年俳優がこういう運命の人であろうとは、私も思い付かなかつた。

三 茶碗

○君が来て古い番茶茶碗をくれた。おてつ牡丹餅ぼたもちの茶碗である。おてつ牡丹餅は維新前から麴こうじまち町の一名物であった。おてつという美人の娘が評判になったのである。元園町一丁目十九番地の角かどみせ店で、その地続きが元は徳川幕府の薬園、後には調練場となっていたので、若い侍などが大勢集つて来る。その傍そばに美しい娘が店を開いていたのであるから、評判になったも無理はない。

おてつの店は明治十八、九年頃まで営業を続けていたかと思う。

私の記憶に残っている女主人おんなあるじのおてつは、もう四十位であつたらしい。眉を落して齒を染めた小作りの年増としまであつた。髻むこを貫つたがまた別れたとかいうことで、十一、二の男の児こを持つていた。美しい娘も老いて俤おもかげが變つたのであろう。私の稚おさない眼には格別の美人とも見えなかつた。店の入口には小さい庭があつて、飛石伝いに奥へ這入はいるようになっていた。門かどの際きわには高い八やつ手てが栽うえてあつて、その葉かげに腰かたを屈かがめておてつが毎朝入口を掃はいているのを見た。汁粉しること牡丹餅さびとを売つていたのであるが、私が知つてゐる頃には店も甚だ寂さびれて、汁粉も牡丹餅もあまり旨うまくはなかつたらしい。近所ではあつたが、私は滅多めったに食たに行つたことはなかつた。

おてつ牡丹餅の跡へは、万屋よろずやという酒屋が移つて来て、家屋も全部新築して今日こんにち日まで繁昌している。おてつ親子は麻布の方へ引越したとか聞いているが、その後の消息は絶えてしまった。

私の貰つた茶碗はそのおてつの形見である。O君の阿父おとうさんは近所に住んでいて、昔からおてつの家とは懇意こんいにしていた。維新の当時、おてつ牡丹餅は一時閉店するつもりで、その形見といったような心持で、店の土瓶どびんや茶碗などを知己の人々に分配した。O君の阿父さんも貰つた。ところが、何かの都合からおてつは依然その営業をつづけていて、私の知っている頃までやはりおてつ牡丹餅の看板を懸けていたのである。

汁粉屋の茶碗というけれども、さすがに維新前に出来たものだ

けに、焼も薬も悪くない。平仮名でおてつと大きく書いてある。私は今これを自分の茶碗に遣つてゐる。しかしこの茶碗には幾人の唇が触れたであろう。

今この茶碗で番茶を啜つてゐると、江戸時代の麴町が湯気の間から蜃気楼のように朦朧と現れて来る。店の八つ手はその頃も青かった。文金島田にやの字の帯を締めた武家の娘が、供の女を連れて徐かに這入つて来た。娘の長い袂は八つ手の葉に触れた。娘は奥へ通つて、小さい白扇を遣つていた。

この二人の姿が消えると、芝居で観る久松のような丁稚が這入つて来た。丁稚は大きい風呂敷包を卸して椽に腰をかけた。どこへか使に行く途中と見える。彼は人に見られるのを恐れるように、

なるたけ顔を隠して先まず牡丹餅を食った。それから汁粉を食った。銭を払つて、前垂で口を拭いて、逃げるように狐鼠こそこそと出て行つた。

講武所風の鬻まげに結つて、黒木綿の紋附、小倉の馬乗袴うまのりばかま、朱鞆ゆざやの大小の長いのをぶつ込んで、朴齒ほおばの高い下駄をがら付かせた。若侍わかざむらいが、大手を振つて這入つて来た。彼は鉄扇てっせんを持つていた。悠々と蒲団の上に座つて、角細工つのさいくの骸骨がいこつを根付ねつけにした煙草たばこ入れを取出した。彼は煙を強く吹きながら、帳場に働くおてつたの白い横顔を眺めた。そうして、低い声で頼山陽らいさんようの詩を吟じた。

町の女房らしい二人連づれが日傘を持って這入つて来た。彼らも煙

草入れを取出して、鉄漿おはぐろを着けた口から白い煙を軽く吹いた。山の手へ上つて来るのは中々草臥くたびれるといった。帰りには平河ひらかわの天神様へも参詣さんけいして行こうといった。おてつと大きく書かれた番茶茶碗は、これらの人々の前に置かれた。調練場の方ではどツときという関とぎの音が揚つた。ほうろく調練が始まつたらしい。

私は巻煙草のを喫みながら、椅子に倚より掛つて、今この茶碗を眺めている。曾かつてこの茶碗に唇を触れた武士も町人も美人も、皆それぞれのの運命に従つて、落付く所へ落付いてしまったのであろう。

四 植木屋

植木屋の忤せがれが松の緑を摘つみに来た。一昨年おととしまではその父が来たのであるが、去年の春に父が死んだので、その後は忤が代りに来る。忤はまだ若い、十八、九であろう。

昼休みの時に、彼は語った。

自分はこの商売をしないつもりで、築地の工手学校に通っていた。もう一年で卒業という間際まぎわに父に死なれた。とても学校などへ行つてはいられない。祖母は父の弟の方へ引取られたが、家には母がある。弟がある。自分は父と同職の叔父おじに附いて出入先を廻ることになった。これも不運で仕方がないが、親父がもう一年生きていてくれればと思うことも度々たびたびある。自分と同級の者は皆学校を卒業してしまった。

あきらめたというものの、彼の声は陰くもっていた。私も暗い心持になった。

しかし人間は学校を卒業するばかりが目的ではない。ほかにも色々の職業がある。これからの世の中は学校を卒業したからといって、必ず安楽に世を送られると限ったものではない。なまじい学問をしたために、かえって一身の処置くるしに苦むようなこともしばしばある。親の職業を受嗣うけついで、それで世を送って行かれれば、お前に取って幸福でないとはいえない。今お前が羨うらやんでいる同級生が、かえってお前を羨むような時節がないとも限らない。お前はこれから他念なく出しゅっせい精せいして、植木屋として一人前の職人になることを心掛けねばならないと、私はくれぐれもいい聞かせた。

彼も会得したようであつた。再び高い梯はしごに昇つて元気よく仕事をしていた。松の枝が時々にみしりみしりと撓たわんだ。その音を聴きくごとに、私は不安に堪たえなかつた。

五 蜘蛛

庭の松と高野槇こうやまきとの間に蜘蛛くもが大きな網を張っている。二本ながら高い樹で丁度二階の鼻の先に突き出ているので、この蜘蛛の巣が甚だ眼障めざわりになる。私は毎朝払い落すと、午頃ひるごろには大きな網が再び元のように張られている。夕方に再び払い落すと、明る朝にはまたもや大きく張られている。私が根よく払い落すと、

彼も根よく網を張る。蜘蛛と私との鬪たたかいは半月あまりも続いた。

私は少しく根負けの気味になった。いかに鉄条網を突破しても、
当の敵かたきの蜘蛛を打ち亡ぼさない限りは、到底最後の勝利は覚束おぼつか
ないと思つたが、利口な彼は小さい体を枝の蔭や葉の裏に潜めて、
巧みに私の竿さおや箒ほうきを逃れていた。私はこの出没自在の敵を攻撃す
るべくあまりに遅鈍であつた。

彼の敵は私ばかりではなかつた。ある日強い南風が吹き巻まくつて、
松と槓との枝を撓たわむばかりに振り動かした。彼の巢もともに動揺
した。巢の一部分は大きな魚に食い破られた網のように裂さけてし
まった。彼は例の如く小さい体を忙がしそうに働かせながら、風
に揺られつつ網の破れを繕つくろつていた。

ある日、庭に遊んでいる雀が物に驚いて飛び起つた時に、彼の
拡げた翼はあたかも蜘蛛の巣に触れた。鳥は向う見ずに網を突き
破つて通つた。それから三十分ばかりの間、小さい虫はまたもや
忙がしそうに働かねばならなかつた。彼は忠実なる工女のように、
息もつかずに糸を織つていた。

彼は善く働くと私はつくづく感心した。それと同時に、彼を駆
逐することは所詮駄目だと、私は諦めた。わたしはこの頑
強なる敵と闘うことを中止しようと決心した。

私が蜘蛛の巣を払うのは勿論いたずらではない。しかし命賭
けでもこれを取払わねばならぬというほどの必要に迫られている
訳でもない。単に邪魔だとか目障りだとかいうに過ぎないのであ

る。これが有^あつたからといって、私の生活に動揺を来すというほどの大事件ではない。それと反対に、彼に取つては実に重大なる死活問題である。彼が網を張るのは悪^{いたずら}戯や冗^{じょうだん}談ではない、彼は生きんがために努力しているのである。彼は生きている必要上、網を張つて毎日の食を求めなければならない。彼には生に對する強い執^{しゆうじやく}着がある。毎日払い落されても、毎日これを繕^{おそら}つてゆく。恐^{おそら}く彼ははいよいよ死ぬという最終の一時間までこの努力をつづけるに相違あるまい。

私は、彼に敵することは能^{でき}ないと悟つた。

小さい虫は遂に私を征服して、私の庭を傲^{ごうぜん}然として占領している。

六 蛙

次は蛙である。青い脊中に軍人の肩章のような金色の線を幾筋も引いている雨蛙である。

私の狭い庭には築^{つきやま}山がある。彼は六月の中旬頃からひよこりとそこに現れた。彼は山をめぐる躑躅^{つづじ}の茂みを根拠地として、朝に晩にそこらを這^はい歩いて、日中にも平気で出て来た。雨が降ると涼しい声を出して鳴いた。

今年の梅^{ばい}雨^{うちゅう}中には雨が少かつたので、私の甥^{おい}は硝子^{がらす}の長い管で水出しを作った。それを楓^{かえて}の高い枝にかけてあたかも躑躅の茂

みへ細い滝を落すように仕掛けた。午後一時半頃、甥は学校から帰つて来ると、すぐにバケツに水を汲み込んで水出しの設備に取とりかかる。細い水は一いったん旦噴き上つて更に真直にさつと落ちて来ると、夏楓の柔い葉は重い雫しずくに堪えないように身を顫ふるわした。咲き残っている躑躅の白い花も湿ぬれた頭を重そうに首肯うなずかせた。滝は折々に風にしぶいて、夏の明るい日光の前に小さい虹を作つた。湿ぬれた苔は青く輝いた。あるものは金色こんじきに光つた。

「もう今に蛙が出て来るだろう。」

こういつていると、果して何処どこからか青い動物が遅々のそのそと這い出して来る。彼は悠然として滝の下にうづくまる。そうして、楓の葉を通して絶間たえまなしに降り注ぐ人工の雨に浴している。バケツ

の水が尽きると、甥と下女とが汲み替えて遣る。蛙は眼を晃らし
ているばかりでちつとも動かない。やがて十分か二十分も経つた
と思うと、彼は弱い女のような細い顫え声を高く揚げて、からか
らからというように鳴き始める。調子はなかなか高いので二階に
いる私にも能く聞えた。

こんなことが十日ほども続くと、彼は何処へか姿を隠してしま
った。甥がいくら苦心しても、人工の雨では遂に彼を呼ぶことが
できなくなった。甥は失望していた。私も何だか寂しく感じた。

それから四日ほど過ぎると朝から細雨が降った。どこやらでか
らからからという声が聞えた。甥は学校へ行った留守であったの
で、妻と下女とはその声を尋ねて垣の外へ出た。声は隣家の塀の

内にあるらしく思われた。塀の内には紫陽花あじさいが繁つて咲いていた。「奥さんここにいますよ」と、下女ささやが囁いた。蛙は塀の下にうずくまつて昼の雨に歌っているのであつた。下女は塀の下から手を入れて難なく彼を捕えて歸つた。もう逃げるのじゃないよといい聞かせて、再び彼を築山のかげに放して遣やつた。その日は一日降ふり暮くらした。夕方になると彼は私の庭で歌い始めた。

家内の者は逃げた鶴が再び戻つて来たように喜んだ。築山に最も近い四畳半の部屋に集つて、茶を飲みながら蛙の声を聴いた。私の家族は俄にわかに風流人になつてしまった。

俄にわか作づくりの詩人や俳人は明る日になつて再び失望させられた。

蛙は再び逃げてしまった。今度はいくら探してももう見えなかつ

た。

その後にもしばしば雨が降った。しかも再び彼の声を聴くことは能^{でき}なかつた。隣の庭でも鳴かなかつた。甥の作った水出しは物置の隅へ投げ込まれてしまった。

「あんなに可愛^{かあい}がつて遣^{やっ}たのに……」と、甥も下女も不平らしい顔をしていた。

実際、我々は彼を苦^{くる}めようとはしなかつた。寧^{むし}ろ彼を愛養していた。しかも彼を狭い庭の内に押込めて、いつまでも自分たちの専有物にしておこうという我^{わが}儘^{まま}な意思を持っていたことは否^{いな}まれなかつた。そこに有形無形の束縛があつた。彼は自由の天地にあこがれて、遠く何処へか立去つたのであろう。

蜘蛛は私に打克うちかつた。蛙は私の囚とらわれを逃れた。彼らはいずれも幸福でないとはいえまい。

七 蛙と騾馬らばと

前回に蛙の話を書いた折に、ふと満洲の蛙を思い出した。十余年前、満洲の戦地で聴いた動物の声で、私の耳の底に最も鮮かに残っているのは、蛙と騾馬との声であった。

蓋平がいへいに宿とまつた晩には細雨こさめが寂しく降っていた。私は兵站部へいたんぶの一室を仮かりて、板の間に毛布を被つて転がっていると、夜の十時頃であろう、だしぬけに戸の外でがあがあと叫ぶような者があ

った、ぎいぎいと響くような者があつた。その声は家鴨あひるに似て非なるものであつた。殊ことにその声の大きいのに驚かされた。

私は蠟燭ろうそくを点つつけて外を窺うかがつた。外は真暗まっくらで、雨は間断しきりなしにしとしとと降つていた。ぎいぎいという不思議の声は遠い草くさむ叢らの奥にあるらしく思われたので、私は蠟燭を火繩ひなわに替えた。

そうして、雨の中を根好こんよく探して歩いたが、怪物の正体は遂に判らなかつた。私は夜もすがらこの奇怪なる音楽のために脅おびやかされた。

夜が明けてから兵站部員に訊きくと、彼は蛙であつた。その鳴声なごゑが調子外れに高いので、初めて聴いた者は誰でも驚かされる、しかも滅多めったにその形を視みた者はないとのことであつた。漢詩では蛙

の鳴くことを蛙鳴あめいといい蛙吠あべいというが、吠べいの字は必ずしも平ひようそ仄くの都合ばかりでなく、実際にも吠ゆるという方が適切であるかも知れないと、私はこの時初めて感じた。

日本の演劇しげいで蛙の声を聞かせる場合には、赤貝を摺すり合せるのが昔からの習ならいであるが、『太功記たいこうき』十段目の光秀が夕顔棚ゆうがおだなのこなたより現あらわれ出いでた時に、例の小田の蛙かわずが満洲式の家鴨かのような声を張上げてぎいぎいと鳴き出したらどうであろう。光秀も恐おそく竹槍かを担かついで逃げ出すより他ほかはあるまい。私は独りで噴飯ふきだしてしまつた。

ただし満洲の蛙ことごとも悉くこの調子外ればかりではなかつた。中には樂がくじん人の資格を備えている種類もあつた。私が楊家屯ようかんとんに露ろじゆ

宿くした夕ゆう、宵よいの間は例の蛙かどもが破れた笙しょうを吹くような声を遠慮なく張上げて、私の安眠を散々に妨害したが、夜の更けるに随つてその声も漸く断えた。今夜は風の生暖い夜であった。空は一面に陰くもっていた。近所の溜りの池で再び蛙の声が起つた。これは聞慣れた普通の声であつた。わたしは久ひさ振しぶりで故郷の音楽を聴いた。桜の散る頃に箕輪田圃みのわたんぼのあたりを歩いているような気分になつた。私は嬉しかった、懐かしかった。疲れた身にも寝るのが惜いように思われたのはこの夜であつた。

驟馬いななの嘶いなきも甚だ不快な記憶を止めている。これも一種のぎいぎいという声である。どう考えても生きた物の声とは思われなかつた。木と木とが触れ合つたらこんな響を発するであろうかと思

われた。そうして如何にも苦しい、寂しい、悲しい、今にも亡び
そんな声である。ある人が彼を評して亡国の声といったのも無理
はない。決して目出たい声でない、陽気な声でない、彼は人間の
滅亡を予告するように高く嘶いなないているのではあるまいか。

遼陽の攻撃戦が耐たけなわなる時、私は雨の夕暮に首山堡しゅざんぼうの麓へ向つ
た。その途中で避難者に乗せているらしい支那人の荷車に出逢つ
た。左右は一面に高梁こうりょうの畑で真中まんなかには狭い道が通じている
ばかりであった。私はよんどころなしに畑へ入つて車を避けた。
車を牽ひいているのは例の驟馬であった。車に乗っているのは六十
あまりの老女と十七、八の若い娘と六、七歳の男の児この三人で、
他に四十位で頬あざに大きな痣あざのある男が長い鞭むちを執とっていた。車に

は掩蓋おおいがないので、人は皆湿ぬれていた。娘は蒼白あおしろい顔をして、鬢びんしずくに雫たを滴たらしているのが一ひと入おあわれに見えた。

路みちが悪いので車輪は容易に進まなかった。車体は右に左に動揺した。車が激しく揺れるたびに、娘は胸を抱えて苦しそうに咳き入った。わたしはもしや肺病患者ではないかと危ぶんだ。

男は焦じれて打ターター々と叫んだ。そうして長い鞭をあげて容赦なしに瘦せた馬の脊を打った。馬は跳おどつて狂った。狂いながらいくたびか高く嘶いた。娘は老女の膝に倒れかかって、血を吐きそうに強く咳き入った。

遼陽から首山堡の方面にかけて、大砲や小銃の音がいよいよ激しくなった。私は車の通り過ぎるのを待ち兼ねて、再び旧もとの路に

出た。驟馬はまたもや続けて嘶いた。娘は揉み殺されそうに車に揺られていた。やがて男の児も泣き出した。

私が一町ほど行き過ぎた頃にも、驟馬の声は寒い雨の中に遠く聞えていた。

八 おたけ

おたけは暇を取って行つた。おとなしくて能く働^よく女であつたが、たった二週間ばかりで行つてしまった。

これまで奉公していたおよねは母が病氣だといふので急に国へ帰る事になった。その代りとしておたけが目見^{めみえ}得に來たのは、七

月の十七日であつた。彼女は相州の大山街道に近い村の生れで、年は二十一だといつていたが、体の小さい割に老けて見えた。その目見得の晩に私の甥が急性腸胃加答児を発したので、夜半に医師を呼んで灌腸をするやら注射をするやら、一家が徹夜で立騒いだ。来たばかりのおたけは勝手が判らないのでよほど困つたらしいが、それでも一生懸命に働いてくれた。暗い夜を薬取りの使にも行つてくれた。目見得も済んで、翌日から私の家に居着くこととなつた。

彼女は何方かといえは温順過ぎる位であつた。寧ろ陰気な女であつた。しかし柔順で正直で骨を惜まずに能く働いて、どんな場合にも決して忌そふな顔をしたことはなかつた。好い奉公人を

置き当てたと家内の者も喜んでいた。私も喜んでいた。すると四、五日経った後、^{のち}妻は顔を皺^{しか}めてこんなことを私に囁^{ささや}いた。

「おたけはどうもお腹^{なか}が大きいようですよ。」
「そうかしら。」

私には能く判らなかつた。なるほど、小作りの女としては、腹が少し横肥りのようにも思われたが、田舎生れの女には随分こな体格の女がないでもない。私はさのみ気にも止めずに過ぎた。

おたけはいくらか文字^{もんじ}の素養があると見えて、暇があると新聞などを読んでいた。手紙などを書いていた。ある時には非常に長い手紙を書いていたこともあつた。彼女は用の他^{ほか}に殆^{ほとん}ど口を利^きかなかつた。いつも黙つて働いていた。

彼女は私の家へ来る前に青山の某軍人ぼうの家に奉公していたとい
 った。七人の兄妹のある中で、自分は末子であるといった。実家
 は農であるそうだが、あまり貧しい家ではないと見えて、奉公人
 としては普通以上に着物や帯なども持っていた。容貌きりようはあまり
 好くなかったが、人間が正直で、能く働いて、相当の着物も持つ
 ているのであるから、奉公人としては先まず申分のない方であった。
 諄くどくもいう通り、甚ひどく温順い女で、少し粗そそ匆でもすると顔の色を
 変えて平ひらあやま謝あやまりに謝あやままった。

彼女は「だいなし」という詞ことばを無暗むやみに遣つかう癖があつた。ややも
 すると「だいなしあつに暑あつい」とか、「だいなしあつに遅あつくなつた」とか
 いった。病氣も追々に快よくなつた甥あつなどはその口真似くちまねをして、頻しき

りに「だいなし」を流行はやらせていた。

妻も彼女を可愛がつっていた。私も眼をかけて遣やれといっていた。が、折々に私たちの心の底に暗い影を投げるのは、彼女の腹に宿せる秘密であった。気をつけて見れば見るほどどうも可怪おかしいようにも思われたので、私はいつそ本人むかに対つて打付うちつけに問とい糺ただして、その疑問を解こうかとも思ったが、可哀かあいそうだからお止よしなさいと妻はいった。私も何だか気の毒なようにも思ったので、詮議せんぎは先まずそのままにしてしばらく成行なりゆきを窺うかがっていた。

月末になると請宿うけやどの主人が来て、まことに相済まないがおたけに暇をくれといった。段々聞いてみると、彼女は果して妊娠六カ月であった。彼女は郷里にある時に同村の若い男と親しくなつ

だが、男の家が甚だ貧しいのと昔からの家柄が違うとかいっているので、彼女の老いたる両親は可愛い末の娘を男に渡すことを拒こばんだ。若い二人は引分けられた。彼女は男と遠ざかるために、この春のまだ寒い頃に東京へ奉公に出された。その当時既に妊娠していたことを誰も知らなかった。本人自身も心付かなかった。東京へ出て、漸しだい次に月の重なるに随つて、彼女は初めて自分の腹の中に動く物のあることを知った。

これを知った時の彼女の悲しい心持はどんなであつたらう。彼女は故郷へこのことを書いて遣つたが、両親も兄も返事をくれなかつた。帰るにも帰られない彼女は、苦しい胸と大きい腹とを抱えてやはり奉公をつづけていると、盆前になつて突然に主人から

暇が出た。ただならぬ彼女の身体からだが主人の眼に着いたのではあるまいか。主人は給金のほかに反物たんものをくれた。

彼女はいよいよ重くなる腹の児こを抱えて、再び奉公先を探した。探し当てたのが私の家であった。彼女としては辛くもあつたらう、苦しくもあつたらう、悲しくもあつたらう。氣心の知れない新しい主人の家へ来て、一生懸命に働いている間にも、彼女は思うことが沢山あつたに相違ない。いくら陰かげひなた陽ひなたがないといつても、主人には見せられぬ涙もあつたらう。内所ないしよで書いていた長い手紙には、遺瀨やるせない思いの数々を筆にいわしていたかも知れない。彼女が陰くもつた顔をしているのも無理はなかった。そんなこととは知らない私は、随分大きな声で彼女を呼んだ。遠慮なしに用をい

い付けた。私は思い遣りのない主人であつた。

それでも彼女は幸であつた。彼女が奉公替をしたということ、故郷へ知らせて遣つた頃から、両親の心も和らいだ。子まで生したものを今更どうすることも能まいという兄たちの仲裁説も出た。結局彼女を呼び戻して、男に添わして遣ろうということになつた。そう決つたらば旧の盂蘭盆前に嫁入させるが土地の習慣だとかいうので、二番目の兄が俄に上京した。おたけは兄に連れられて帰ることになつたのである。

勿論、暇をくれるという話さえ決れば、代りの奉公人の来るまでは勤めてもいいとのことであつたが、私たちはいつまでも彼女を引止めておくに忍びなかつた。嫁入仕度の都合などもあるう

から直すぐに引取つても差さしつかえ支かえないと答えた。彼女は明あくる日ひの午後に去つた。

去る時に彼女は二階へ上つて来て、わたしの椅子いすの下に手を突いて、叮ていねい寧いとまごに暇乞いとまごいの挨拶をした。彼女は白粉おしろいを着けて、何だか派手な帯を締めていた。

「私の方ではもつと奉公してもらいたいと思うけれども、国へ帰つた方がお前のためには都合がいいようだから——。」

私が笑いながらこういうと、彼女は少しく頬を染めて俯うつむ向いていた。彼女はさぞ嬉しかろう。貧乏であろうが、家柄が違おうが、そんなことはどうでもいい。彼女は自分の決めた男のところへ行くことが能るようになった。彼女は私生児の母とならずに済んだ。

悲しい過去は夢となった。

私も「だいなし」に嬉しかった。

僅か二週間を私の家に送ったおたけは、こんな思い出を残して
去った。

九 元園町の春

Sさん。郡部の方もだんだん開けて来るようですね。御宅の御
近所も春は定めてお賑にぎやかいことでしょう。そこでお前の住んでい
る元園町もとぞのちようの春はどうだという御尋おたずねでしたが、私共の方は昨
今却かえつてあなたたちの方よりも寂しい位で、御正月だからといっ

て別に取立てて申上げるほどのこともないようです。しかし折せつ角かくですから少しばかり何か御通信申上げましょう。

この頃は正月になつても、人の心を高い空の果へ引揚げて行くような、長閑のどかな風たこのうなりは全然聞かれなくなりました。往来の少い横町へ這入はいると、追羽子おいはごの春めいた音も少しは聞えますが、その群の多くは玄関の書生さんや台所の女中さんたちで、お嬢さんや娘さんらしい人たちの立交つてゐるのはあまり見かけませんから、門松を背景とした初春はつはるの巷ちまたに活動する人物としては、その色彩すそぶが頗る貧しいようです。平手ひらてで板を叩くような鼓つづみの音をさせて、鳥打帽子かぶを被つた万歳まんざいが幾人いくにんも来ます。鉦かねや太鼓たいこを鳴らすばかりで何にも芸のない獅子舞も来ます。松の内早仕舞はやじまいの

錢湯におひねりを置いてゆく人も少いので、番台の三宝の上に紙包の雪を積み上げたのも昔の夢となりました。藪やぶ入いりなどは勿論ここらの一いっ角かくとは没交渉で、新宿行の電車が満員の札をかけて忙がしそうに走るのを見て、太宗寺たいそうじの御閻魔おえんまさま様の御繁昌ひそを窃かに占うに過ぎません。

家々に飼犬が多いに引替えて、猫を飼う人は滅多めったにありません。家根伝いに浮かれあるく恋猫の瘦せた姿を見るようなことは甚だ稀です。ただ折々に何処どこからか野良猫がさまよつて来ますが、この闖ちん入にゆう者しゃは棒ぼうや箒きで残酷に追ひ払われてしまいます。夜は静です、実に静です。支那の町のように宵から眠っているようです。八時か九時という頃には大抵の家は門戸を固くして、軒の電灯が

白く凍った土を更に白く照しているばかりです。大きな犬が時々
 思い出したように、星の多い空を仰いで虎のように嘯うそぶきます。こ
 こらでただ一軒という寄席よせの青柳亭あおやぎていが看板の灯ひを卸おろす頃になら
 と、大股に曳き摺ずつて行くような下駄ひの音が一時しきり私の門前
 を賑にぎわして、寄席帰りの書生さんの琵琶歌びわうたなどが聞えます。跡あとは
 ひっそりして、シユウマイ屋とうじんぶえの唐人笛とうじんぶえが高く低く、夜風にわな
 なくような悲しい余韻あかこを長く長く曳ひいて、横町から横町へと闇の
 奥へ消えて行きます。どこやらで赤児あかこの泣く声も聞えます。尺八
 を吹く声も聞えます。角の玉突場たまぶちばでかちかちという音が寒さむそう
 に聞えます。

寒の内には草鞋わらじばきの寒かんぎよう行かんぎようの坊ぼうさんが来きます。中には襟えりま

巻きを暖かそうにした小坊主を連れてあるのもあります。日が暮れると寒参りの鈴の音も聞えます。麴こうじ町まち通りどおりの小間物屋こまものやには今こんにち日にうし紅べにのビラびらが懸かけられて、キルクの草履ぞうりを穿はいた山やまの手の女おんなたちが驕きょう慢まんな態度で店の前に突つ立たちます。ここらの女の白粉おしろいは格別かくべつに濃のいのが眼まなこに着ききます。

四谷街道よつやかいどうに接せしている故ゆゑか、馬力ばりきの車くるまが絶間たえまなく通とつて、さなきだに霜しも融とけの路みちをいよいよ毀こわして行くのも此頃このころです。子供こどもが竹馬たけうまに乗のつて歩くのも此頃このころです。火ひの番銭ばんせんの詐欺さぎの流行はやるのも此頃このころです。しかし風かぜのない晴はれた日ひには、御堀おほりの堤とての松まつの梢しげが自みづずと霞かすみんで、英国大使館えいこくたいしきんの旗竿はたての上に鳶とびが悠然ゆづらんと止とまつているのも此頃このころです。

まだ書いたら沢山ありますが、先まずここらで御免ごめんを蒙こうむります。
さようなら。

十 お染風

この春はインフルエンザが流行した。

日本で初めてこの病やまいが流はやり出したのは明治二十三年の冬で、

二十四年の春に至つてます。猫しやうけつ 獺しやうけつ になつた。我々はその時

初めてインフルエンザという病名を知つて、それは仏蘭西フランスの船か

ら横浜に輸入されたものだといふ噂を聞いた。しかしその当時は

インフルエンザと呼ばずに普通はお染風そめかぜといつていた。何故なぜお

染という可愛らしい名を冠らせたかと詮議すると、江戸時代にもやはりこれに能く似た感冒が非常に流行して、その時に誰かがお染という名を付けてしまった。今度の流行性感冒もそれから縁を引いてお染と呼ぶようになったのだらうとある老人が説明してくれた。

そこで、お染という名を与えた昔の人の料見は、恐らく恋風と
いうような意味で、お染が久松に惚れたように、直に感染すると
いう謎であるらしく思われた。それならばお染には限らない。お
夏でもお俊でも小春でも梅川でもいい訳であるが、お染という名
が一番可愛らしく婀娜気なく聞える。猛烈な流行性を有つて往々
に人を斃すようなこの怖るべき病に対して、特にお染という最も

可愛らしい名を与えたのは頗る面白い対照である、流石に江戸児らしい所がある。しかし例の大虎列刺おおこれらが流行した時には、江戸児もこれには辟易へきえきしたと見えて、小春とも梅川とも名付親になる者がなかつたらしい。ころりと死ぬからコロリだなどと智慧ちえのない名を付けてしまった。

既にその病がお染と名乗る以上は、これに憑着とりつかれる患者は久松でなければならぬ。そこでお染の闖入ちんにゆうを防ぐには「久松留守つるす」という貼札はりふだをするがいいということになった。新聞にもそんなことを書いた。勿論、新聞ではそれを奨励しょうれいした訳ではなく、単に一種の記事として昨今こんなことが流行すると報道したのであるが、それがいよいよ一般の迷信を煽あおつて、明治二十三、

四年頃の東京には「久松留守」と書いた紙札を軒に貼付けることが流行した。中には露骨に「お染御免」と書いたのもあった。

二十四年の二月、私が叔父と一所に向島の梅屋敷へ行った、風のない暖い日であった。三みめぐり囲の堤どてした下を歩いていると、一軒の農家の前に十七、八の若い娘が白い手拭をかぶって、今書いたばかりの「久松るす」という女文字の紙札を軒に貼っているのを見た。軒の傍そばには白い梅が咲いていた。その風情は今も眼に残っている。

その後のちにもインフルエンザは幾度も流行を繰返したが、お染風の名は第一回限りで絶えてしまった。ハイカラの久松に憑着くにはやはり片かた仮かな名のインフルエンザの方が似合うらしいと、私の父

は笑っていた。そうして、その父も明治三十五年にやはりインフルエンザで死んだ。

十一 狐妖

音楽家のS君が来て、狐の軍人という恠談かいだんを話して聞かせた。

それは明治二十五年の夏であった。軍人出身のS君はその当時見習士官として北の国の〇〇師団司令部に勤務中で、しかも自分が当番の夜よの出来事であるから決して誤謬ごびゆうはないと断言した。

狐が軍人に化けて火薬庫の衛兵を脅かそうとしたというのである。
赤あか羽あかばねや宇治の火薬庫事件が頭に残っている際であるから、私は

一種の興味を以てその話を聴いた。

どこも同じことで、火薬庫のある附近には、岡がある、森がある、草が深い。殊に夏の初めであるから、森の青葉は昼でも薄暗いほどに茂っていた。その森の間から夜半の一時頃に一つの提灯がぼんやりとあらわれた。歩哨の衛兵が能く視ると、それは陸軍の提灯で別に不思議もなかった。段々近いて来ると、提灯の持主は予て顔を見識っているM大尉で、身には大尉の軍服を着けていた。しかし規則であるから、衛兵は銃剣を構えて「誰かツ」と一応咎めたが、大尉は何とも返事をしないで衛兵の前に突つ立つていた。

返事をしない以上は直に突き殺しても差支ないのであるが、

みすみすそれが顔を見識っている大尉であるだけに、衛兵もさすがに躊躇ちゆうちよした。再び声をかけたが、大尉はやはり答えなかつた。その中に衛兵は不思議なことを発見した。大尉の持っている提灯は紙ばかりで骨がなかった。大尉は剣も着けていなかった。衛兵は三たび呼んだが、それでも返事のないのを見て、彼はやにわに銃剣を揮ふるつて大尉の胸を突き刺した。大尉は悲鳴をあげて倒れた。

衛兵はその旨むねを届け出たので、隊でも驚いた。司令部でも驚いた。当番のS君は真先に現場げんじょうへ出張した。聯隊長その他も駈か付けて見ると、M大尉は軍服を着たままで倒れていた。衛兵の申も立うしたてとは違って、その持っている提灯には骨があつた。しかし

劍は着けていなくかつた、靴も穿はいていなくかつた。殊ことに当番でもない彼が何故なぜこんな姿でここへ巡回して来たのか、それが第一の疑問であつた。取とりあえずM大尉の自宅へ使を走らせると、大尉は無事に蚊帳かやの中に眠つていた。呼び起してこの出来事を報告すると、大尉自身も面めんくら食つて早々にここへ駈付けて来た。

大尉は小作りの人であつた。倒れている死体も小作りの男であつた。何なにびと人も初めは一見して彼を大尉と認めていたが、ほんとうの大尉その人に比較して能く視ると、まるで似付かないほどに顔が違つていた。陸軍大尉の軍服は着けているが、どこの誰だか判らないということになつてしまつた。要するに彼はほんとうの軍人でない、何者かが軍人に変装してこの火薬庫へ窺うかがい寄つたの

ではあるまいかという決論に到着した。果してそうならば問題がまた重大になつて来るので、死体を一先ひとまず室内へ昇かき入れて、何や彼かやと評議をしている中うちに、短い夏の夜はそろそろ白んで来た。死体は仰あおもむけ向よこたに横よこたえて、顔の上には帽子が被せてあつた。

とにかくに人相書にんそうがきを認しめたたつた。の死体の顔から再び帽子を取除とりのけると、彼は思わずあつと叫んだ。硝子ガラスの窓から流れ込む暁あかつきの光に照された死体の顔は、いつの間にか狐きつねに變つていた。狐が軍服を着ていたのであつた。

「狐が化けるはずはない。」

若い士官たちは容易に承認しなかつた。しかし現在そこよこたわに横よこたわつている死体は、人間でない、勿論M大尉でない。たしかに一匹の

古狐であつた。若い士官たちが如何いかに雄弁に論じても、この生き
た証拠を動かすことは不可能であつた。狐や狸が化けるといふ伝
説も嘘ではないといふことになつてしまつた。S君も異議を唱え
た一いちにん人で、強情に何時いつまでも死体を監視していたが、狐は再び
人間に復かえらなかつた。朝がだんだん明るくなるに従つて、彼は茶
褐色の毛皮の正体を夏の太陽の強い光線の前に遠慮なく曝さらけ出だ
てしまつた。ただし軍服や提灯の出所は判らなかつた。

「狐が人間に化けるなどといふことは信じられません。私は今で
も絶対に信じません。けれども、こういう不思議な事実を曾かつて目
撃したといふことだけは否いなむ訳に行きませんよ。どう考えても判
りませんねえ」と、S君は首をかしげていた。私も烟けむにまかれて

聴
い
て
い
た。
。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂隨筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「五色筆」南人社

1917（大正6）年11月初版発行

初出：「木太刀」

1915（大正4）年3、7、8、9月、1916（大正5）年1、4月号

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

2011年10月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二階から

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>